

令和3年度（2021年度）を振り返って

教職センター長 石 原 義 文

2021年度もまた、コロナ禍に大きく影響を受けた一年となりました。感染症は一旦は落ち着きを見せ、オンライン授業の実施で閑散としていたキャンパスも、夏からは学生の姿が戻り活気を取り戻しました。しかし、オミクロン株の感染拡大で再びオンライン授業形式となりました。未だに予断を許さない状況です。

教育実習や体験活動等の休止や延期、代替実施、感染拡大防止をした上での対面授業や教育実習等の再開など、予想外の状況の中で授業や実習等の実施などにおいて、教職員・学生ともに多大なる苦勞がありました。

このような、過去に経験のない状況の中で、大学や学校現場には、あらためて教員養成教育の在り方の再考と現実的な対応が日々迫られて来ました。先行きの不透明な感染拡大への懸念、新たな生活様式が言われる中で、いかに質を担保した授業を展開し、実践力のある教員の養成に向けた教育ができるかが問われていると思います。

2021年5月に教育職員免法施行規則が改正され、2022年4月より教職課程の自己点検・評価の実施が義務化されることになりました。そのねらいは、教職課程の質向上のために、各大学が自らの責任で教職課程の活動について点検・評価を行い、改革・改善に努めるとともに、その結果を社会に公表し、教職課程の質を自ら保証するという内部質保証体制を確立することにあります。折しも本学では来年度で教育学部の完成年度を迎え、1年次から4年次の学生が揃いカリキュラムを全て実施することになります。そして1期生を送り出し、世の評価を問うことになります。

各方面からのご助言・ご指導をいただきながら、教職課程の質の向上に向けた、自己点検・評価に関する継続的な取り組みを続けていきたいと思っています。